

「アフリカ子どもの本プロジェクト」

子どもたちの未来を支える  
ケニアのドリームライブラリー

アフリカ子どもの本プロジェクト会員・編集者 ほそえさちよ

『エンザロ村のかまど』（福音館書店）という絵本を「存在しでしようか。電気も水道もない村で、生活改善・保健栄養指導を行っていた岸田袈裟さんが、レンガと土で作るかまどやバナナの茎の皮やサイザル麻を編んだ草履を伝え、たくさんの人々の暮らしが変わっていった様子を描いています。当時、ケニアではHIV感染で親を亡くした子どもが増えており、昔ながらの語りの文化を享受する機会も減っているようでした。子どもたちに本を読む楽しみを知ってもら

おう、また、教育や知識を得ること、自分たちの暮らしを引き上げていくことが大切だという岸田さんの考えを受け、村に子ども図書館を作ることになり、日本の児童書関係者と「NGO少年ケニアの友」の協力で、2004年秋にエンザロ・ドリームライブラリーがオープンしました。

帰国後、この図書館づくりに携わった有志で設立したのが「アフリカ子どもの本プロジェクト」です。2008年には2館目の図書館、シャンダ・ドリームライブラリーをケニア西部、カカメガ地区のシャンダ小学校にオープン。現在、この2館の運営を支える活動（司書の給与、本の寄贈など）と、日本の子どもたちにアフリカのこ

とを知ってもらう活動（「アフリカを読む・知る・楽しむ子どもの本展」の開催、お勧め本の紹介など）を中心に取り組んでいます。昨年の8月、プロジェクト代表で翻訳家のさくまゆみこ、翻訳家で会計担当の佐藤見果夢、編集者

で選書担当のほそえの3名がエンザロとシャンダのドリームライブラリーを訪問しました。

エンザロで開館当初から司書として勤務しているピーターさんは、1時間以上かけて徒歩で隣村から週6日出勤。月に数回まとめて届けられる新聞のヘッドラインをまとめ、目的の情報を取り出しやすくしたり、子どもたちに本を紹介したり、本の整理をしたりと、大忙し。たくさんの子に読まれ、表紙がはずれかかったり、ページがポロボロになった本が多くありました。「あまりに状態のひどい本は廃棄を」と伝えると、「それはできない。まだ読めるではないか」と言われます。それだけ活字や本が大切にされているのです。

日本から持参した修繕用テープは、たいへん喜ばれました。プロジェクト作成の図書館司書用ハンドブックを一緒に見ながら、本の修繕の仕方をレクチャーしたり、蔵書チェックの仕方や児童サービスの内容を相談するうち

に、ピーターさんの表情がどんどん柔らかくなっていききました。図書館がどういふものなのかまったく知らない人たちの中で、10年間たったひとりで司書の仕事を続けるのは並大抵のことではありませ

ん。本についての話ができる、ということだけでもピーターさんにとつてうれしいことだったのでしょうか。プロジェクトでは「What is the Library?」というQ&A形式の英語とスワヒリ語併記のリーフレットを開館時に作って配布したり、学校に渡して図書館の認知を進めてきました。そのおかげか、この図書館で勉強し、大学まで進む子どもが年々増えていくと、ピーターさんが笑顔で教えてくれました。

シャンダ・ドリームライブラリーは小学校の敷地内にあります。学校には図書館がないので、休み時間や放課後に、たくさんの子どもたちがライブラリーに本を読みに来ています。休みの日には、近隣の村の人や卒業生なども来るそうです。シャンダでは交流会で子どもたちが素晴らしいダンスや歌を披露してくれました。

どちらの地域でも図書館ができて、子どもたちの教育水準が上がったこと、近隣からの本を読み

にくる子どもが増え、友人関係が広がったことなどを喜ぶ声が聞かれました。今後は、なかなか配布されない教科書などを蔵書に入れてほしい、司書の給料を上げてほしい、という意見も出ました。私たちは最終的に地域の人々で図書館運営ができるように手渡していきたいと考えていますが、特にこれらの農村は貧しく、現金収入を得にくい地域であることも重々承知しています。だからこそ、教育

が大切なのですが……。

今回の旅では図書館でさまざまな知識にふれ、おはなしを楽しむケニアの子どもの姿に、「本の力」を再認識させられました。これからも本を通して、日本とアフリカの子どもたちをつなげていきたいと思えます。



エンザロ・ドリームライブラリー  
外観



持参した分類シールを本に貼る、ピーターさん、佐藤さん、さくまさん、NGO職員（左より）